イースタン・カーライナー

新型トリプルデッカーを26年に整備

イースタン・カーライナー（ECL）は在来・多目的船と自動車船を使った重量物輸送サービスを展開している。今年は新たに１万7000重量トン型トリプルデッカー（三層甲板船）の新造用船も決めており、2026年の竣工を予定している。既存船隊よりも大型の250トン吊りクレーン２基をサイドに設置。オンデッキで80mの長尺物貨物の輸送も可能となっており、これまでよりもさらに幅広い貨物を輸送できると期待している。

ECLが重量物輸送で活用している船隊は在来・多目的船の１万3000～１万4000重量トンのツインデッカー20隻と、自動車船部門の4000台積み６隻、650台積み２隻。ツインデッカーのうち５隻は2023～24年に新造整備した。クレーンキャパシティは60～150トン。

2026年の竣工を予定している１万7000重量トン型船では、クレーンキャパシティを１基250トン吊り（タンデムで500トン吊り）としたことで、荷役機器が備え付けられていない港湾向けでの重量物輸送にも対応可能となる見込みだ。小ぶりな船型を活かし、小回りのきいた運用を想定している。

ECLの営業体制は日本のほか、海外拠点も活用しながらグローバルに展開。12カ国・地域に19拠点があり、うち米国が１拠点、ほか 18拠点がアジア各国に置かれている。海外拠点のスタッフは日本人、ローカルスタッフ併せて200人弱。海技者も多数配置しており、日系顧客に対する細かなカーゴケアやニーズへの対応が可能となっている。日本の細かな顧客ニーズを理解したローカル人材の海技者育成も行っている。

カーゴケアや輸送品質の向上の取り組みも継続して行っており、今年はロスプリベンション（事故未然防止）教育の強化も進めているほか、来年早々には在来船で自走貨物の吊り上げ荷役時、カーゴダメージを軽減する荷役機器（プラットフォーム）を導入する予定だ。

海外拠点ではシンガポールと香港の拠点にオペレーション機能があるため、日本出しだけでなく海外の輸送需要にも対応。今後この２拠点でのオペレーション機能を拡充していくことで、日系顧客のニーズに合わせた海外発の貨物取り込みも強化していく方針。

北米向けでは定期配船サービスでジャンボタイヤの輸送を手掛けるほか、東南アジア向けでは鋼材、設備機械、建設機械の輸送を行っている。ターゲットとするエリアはアジア域内を中心に中東、北米、中南米、欧州、豪州など。ここ１年で中東や欧州向け、豪州向けなどが増えている。またコンテナ船の運賃上昇の影響で、設備機械などフラットラックで輸送する北米向け貨物が伸びる傾向にある。また積み地としては日本だけでなく、中国や韓国も増えている。

今年は大型貨物として日本から250トンの設備機械を北米向けに運ぶなどしている。港湾に荷役機器が設置されているケースではクレーンキャパシティ以上の重量のある貨物も既存船隊で積極的に取り込みを図っていく。また新たな貨物としては海外のインフラ関係の輸送や日本向け新エネルギー関連の風力発電部材、EV（電気自動車）関連の需要取り込みに注力する考えだ。

自動車船部門では今年、新たにターミナルトラクター（タグマスター）を３台追加調達。RORO船のスペースも有効活用して一般貨物や鉄道車両の輸送拡大にも取り組む。

EASTERN CAR LINER, LTD.

https://www.ecl.co.jp/